

通信教育のスクーリングにおける協同学習の一事例

関田一彦
(創価大学 教育学部)

創価大学には通信教育部として通信制学士課程が設置されている。通信教育部では、スクーリング（集中講義）に関して授業アンケートを実施していないが、私は試験が早く終わった学生に対して、答案用紙の余白に授業への感想や意見を記入するよう促している。むろん、どんなコメントを書いても成績に反映しないことを明言した上での、任意なお願いである。幸い、多くの肯定的なコメントを戴いているが、その中で数は少ないものの通信教育部生特有のものに、「受講して元気になった」という趣旨の興味深い感想がある。

大学の授業は科目内容を正しく伝えるために、あるいは最先端の研究成果を紹介するために行うのであって、学生の学習技能や学習意欲を伸ばすことを目指すものではない、という考え方がある。その立場に立てば、学生に理解させるための工夫は必要でも、学習意欲の低い学生や事前の準備不足から授業について来られない学生を気遣って、学生に迎合するような授業はすべきでない、という主張は当然である。したがって、授業を受けて学生が元気になるかどうかを気にする、という発想自体がナンセンスかもしれない。けれど私は、通信教育のスクーリングという特殊性を考慮した授業をしたいと考えてきた。

私の授業には協同的な学習活動が随所に取り入れられている（関田 2004a）。学生たちは前後左右の学友とともに、様々な話し合い学習を行う。その際、相手の話をよく聴き、相手の学び（理解度）に気遣いながら一緒に課題を達成していく大切さが強調される。初対面の学友たちは、最初のうちは戸惑いながら話し合っているが、その日の終わりには明日の再会を心待ちにする仲になっている。「はじめてのスクーリングで不安だったが、一緒に学ぶ仲間ができてよかった」、「こんなに友達ができたスクーリングは初めてだ」、「話し合いを通してグループの仲間から多くのことを学べた」、「話し合っただけで学ぶ方が身につくことを実感した」等など、協同学習の効果に対する驚きと喜びのコメントが多数寄せられる。こうした友好的な人間関係と話し合いを促進する課題設定に支えられて、彼らの授業に対するイメージや自尊感情も肯定的に変化していく（関田 2004b）。

スクーリングに参加するために直前まで必死で働き、漸く職場の理解を得て休暇を取って参加してくる社会人。あるいは、いつもより朝早く起き、家族の世話を済ませて駆けつけてくる主婦の方々。彼ら彼女らに、通常の学部生と同じ量の予習復習を期待するのは酷だろう。まして、2日間あるいは4日間集中の授業では、十分に講義内容を咀嚼するゆとりも無いだろう。さらに、スクーリングで初めて出会う見ず知らずの人たちに囲まれて、長時間慣れない学習に取り組む疲労は相当であろう。加えて、私の授業は通常、580名収容の階段教室であり、椅子は机と一体となった固定式である。それでも私の授業では「スクーリングではじめて居眠りせずに最後まで授業を聞きました」というコメントが、何人もの学生から寄せられる。時には300名を超える学生を相手にグループ活動を導入するには不向きな環境ではあるが、それなりに実効あるグループ学習ができていることは、多くのコメントが示している。このように、スクーリングの特殊性に対応しつつ、学生の意欲

的な学びを励ます協同学習方式の授業の意義は大きいと思われる。

ビデオの概要

ビデオ映像は活動のポイントを編集したもののだが、その流れを簡単に記述して表に示す。授業全体には、ウォーミングアップや振り返りなど、協同学習を円滑に進める上で有益な活動を他にも組み入れているが、今回の発表では、話し合い活動を取り上げた。なお、授業の構成は、各トピックに関する質問（課題）を提示し、まず個人で考えさせ、次にグループで各自の考えを検討し、必要に応じてクラス全体で共有するパターンの繰り返しであり、ここで示すものが基本形である。

表) スクーリング科目「情報教育論」における授業の手順（話し合い活動編）

時間配分	働きかけ(発問・指示・解説)	活動のねらい
(1～3分間)	発問1) 皆さんが生きている情報社会とは何か? 定義してみましょう。	個人思考
(5～7分間)	指示1) 自分の言葉で、自分のノートに定義を書きましょう。	輪番発表
	指示2) 次に、チームで自分たちの定義を紹介しあい、互いの良いところを統合して、チームとして一つの定義をつくりなさい。その際、必ず全員が順に自分の考えを述べてから、まとめはじめること。	チームまとめ
	指示3) あとで、クラスに発表してもらいますので、チームの誰が指名されてもきちんと答えられるように、互いに準備してください。	チーム責任の明確化
(10分以上)	指示4) これからクラス全体のために、各グループの定義を発表してもらいますが、次の2点に気をつけてください。	クラス貢献の確認
	1) 指名された人は、グループの代表として、堂々と自信をもって話してください。ただし、同じような定義が先に言われたら、パスして結構です。前のグループの発表を良く聞いて、なるべく重複は避けてください。	発表の指導
	2) 発表を聞く人たちは、自分たちの定義にはない、新しい視点や素敵な表現など、気づいたことはどんどん自分のノートに追加しましょう。他のグループからどれだけ学べるかが、ポイントです。	聞き方の指導
(3分程度)	解説) 今、クラス全体でいくつくらい定義が出てきましたか? 自分たちの定義に、何か新しい付け足しや修正があったチームは手を挙げてください。	活動の振り返り
	かなりのチームが新たに何かを学んだようですね。自分たちの限界を超えて、新たな考えが深まるのはクラスの力です。皆さんは、教師から一方的に学ぶことに慣れていますが、クラスの仲間から学ぶことが大切です。誰からでも学べる人は素晴らしいです。	クラス全体で協同する意義の確認
	(以下省略)	ビデオにはありませんが、通常の協同学習では、活動の終わりに各自のチームへの貢献確認を行います。
	指示) 今日一緒に学んだ仲間がチームの学びに貢献した点を具体的に上げて賞賛し、感謝します。チーム全員が必ず誰かから賞賛してもらったら終わりです。互いの健闘を祝してHiタッチします。	

参考文献

- 関田一彦(2004a)「第二章 協同学習のすすめ」杉江・他編著『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部。
 関田一彦(2004b) 集中講義「教育心理学」が受講者の心理的態度に与える影響。創価大学教育学部論集、56号、pp.67-78。